# 竜†恋
[Dra+KoI]

ウロボロス
# ∞竜の恋



# 竜†恋[Dra+KoI]

## ∞（ウロボロス）竜の恋

「おまえの接吻(くちづけ)と想うなら
心臓(ハート)に埋(うず)もる刃も
また愛し」

それはまだ、英雄を必要とした時代の物語。神代のむかし、黄金の時代、まだ竜が地上で権威を振るっていたあの頃の、夢を見るのが必死だったあの頃の、無邪気な夢(ロマン)が世に満ちていたあの頃の、語られるべくして語られる物語。

それは英雄譚。そのはじまり。序夜の第一幕。

舞台設定。燃える空の赤と、大地を染める血の赤。戦争(ウォー)という名の悪魔(ドラクル)の爪跡。戦乱(ストーム)という名の病魔(ベルゼバブ)に蝕まれ、痩せ衰えてゆく世界。尽きぬ憎悪と終わらぬ嘆きと逃げ場のない狂気。

救いを求める世界のかすれた叫びと呪いの様な祈り。英雄を。英雄を。英雄を。英雄をこの地に、我々の物語に与えよ。英雄を。英雄を。英雄を——

舞台中央。屍と屍の絨毯の、二度と息せぬ残骸に紛れた、それらと大して変わらぬ有り様の死体のなり損ね。小鳥の羽毛すらそよがせぬ虫の息の、その一息一息ごとに幽(かす)かに残った温もりさえも失っていく、主役ではない、端役(はやく)でもない、有象無象ですらない単なる背景美術の一部品——夢潰えたひとりの少年。

無意味な死。元より無意味な命。そのはずだった。

「此処が夢の最涯(さいはて)」

だがその取るに足らない、塵にも等しいちっぽけな命を見下ろす影があった。夜の帳を気配(ドレス)に纏う漆黒の少女。その登場をもって、物語は劇的な変容を迎える。舞台装置(デウス・エクス・マキナ)の歯車が逆転する。

「語られることがない物語の、最後の夜と閉幕。思い出されることのない、忘れ去られることすらない、つまりは存在しなかった物語が今際の刻(とき)に見る幻影」

少女の声に、少年の眼がわずかに動く。もはや光を捉えぬ瞳が、だがしかし彼女の瞳を捉える。彼女の、見るものを射殺すような蛇の眼を。竜の、瞳を。

「総ての夢(ロマン)は灼け墜ちた。君の命に価値は無く、君の瞳に映る世界に意味は無く」

重なるふたりの視線。それにこそ魔力が宿る、そんなことにも気づかずに。

「だけど、それでもなお、夢の最涯(さいはて)を踏み破るというのなら——」

夜の帳の少女の、竜の瞳に揺らぐ何かが浮かんで、消える。

「君は英雄になる。夢を貪り喰らって生きる、一個のおぞましい怪物に」

夜の帳の少女が問う。

「——どうしますか？」

少年は、何と答えたのだろう？ 小鳥の羽毛すらそよがせぬ虫の息を震わせて。

はたして、少女は、頷いた。

「今から君は妾(わたくし)の王」

夜の帳の少女の貌が寄せられる。口づける。虫の吐息の肺腑の奥に、竜の息吹を注ぎ込む。

「我が王よ。竜王(ペンドラゴン)よ。我が真名をその魂にしかと銘記せよ。妾(わたくし)は黒の鱗の生を享けし者。夜を纏う舞い手にして、夜を馳せる凶風(まがつかぜ)。妾(わたくし)は清き黒の竜姫……」

それはまだ、英雄を必要とした時代の物語。神代のむかし、暗黒の時代、まだ竜が地上で悪意を振るっていたあの頃の、夢と夢が輪廻の竜の如く互いを喰らっていたあの頃の、惨酷な夢(ロマン)が世に満ちていたあの頃の、語られるべくして語られる物語。

英雄譚が、君の物語が受肉する。

「妾(わたくし)の名は——」

†††

——君は何者か。

「我は、殺戮者である」



君は何も理解していなかったが、ただそれだけを理解していた。磨耗し切った記憶、ただ殺意だけが綺麗な宝石のように純化されて、心の虚の真ん中に位置していた。
殺意は甘く温かな感傷を呼び起こし、君はそれに安らぎ、満足した。君は自分が殺すために生きていることを実感した。
やわらかな殺意を胸に、白いコートを翻し、君は人混みを縫って歩く。戮さなければ／戮さなければ／戮さなければ。「何を？」解からない。「何故？」解からない。戮さなければ／戮さなければ／戮さなければ。君の命はそのためにある。
街を往く——街を往く——街を往く——ヒトの群れを彷徨いながら／迷いもせず。流れていく景色と喧騒。青信号の電子音。ヒトとヒトとヒトの声。歓声。怒号。街頭スクリーンから聴こえる映画の予告。戮さなければ／焦燥と充足／激情と平常／＝調和。
街を往く——街を往く——街を往く——当て所もなく／確固たる目標に向かって。叩きつけるビル風。排気ガス。香水。アルコールとアンモニア。戮さなければ／心の澱と爽快感／心の檻と解放、自由／＝調和。
街を往く——街を往く——街を往く——迷子のように／騎士のように。街の灯。テールライト。点滅する信号。動き出すヒトとヒトとヒトの群れ。夕陽／血の色。街頭スクリーンに映し出される映画の予告。戮さなければ／憧憬と憎悪／郷愁と侵襲／＝調和。
街を往く——街を往く——街を往く——

雑念雑念雑念雑念雑念雑念雑念雑念雑念雑念
雑念雑念雑念雑念雑念雑念雑念雑念雑念雑念
雑念雑念雑念雑念雑念雑念雑念雑念雑念雑念

（——燃える空——）
（——血に染まる大地——）
（——赤と赤と赤の世界に——）
（——黒く／黒く／黒く——）
（——影——）
（——闇——）
（——夜の帳——）
（——夜の帳を纏う——）

少女が、

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□閃光(ホワイト・アウト)□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

少女が、

君は息を呑む。

雑踏†ヒト／ヒト／ヒトの群れ†血の色の黄昏†赤／赤／赤の世界†黒く／黒く／黒く†影†闇†夜の帳。

夜の帳を気配(ドレス)に纏う漆黒の少女が、其処にいた。

視線が合う。君の瞳が彼女の瞳を覗き込む。竜の、瞳。

君を撃つ、脳天から全身を貫く歓喜／全身を磨り潰すような悲しみ。

——戮さなければ。

(駈ける)

君は駈け出した。白いコートを翻し、人混みを縫って、一個の弾丸のように。

少女は君に微笑みかける。黒のドレスを翻し、雑踏に消える。

——戮(ころ)さなければ。

君は彼女を追う。逃がしはしない。君は全身で彼女の気配を捕捉する。君の眼は彼女の影を捉え、君の耳は彼女の鼓動を聴き、君の鼻は彼女の芳香を嗅ぎ取り、君の肌は彼女の動きを感じ、君の舌は彼女の味を追憶し、君の臓腑は彼女の心を察し、君の細胞の一つ一つ、神経を奔(はし)る電流(パルス)に至るまで、君を構成する遍(あまね)く総てが彼女を追い求める。

人混みを流れ／流れ／流れてゆく夜の帳の黒の影。人混みから人混みへ。街角から街角へ。夢から夢へと。

君もまた少女の影を追い、形を求め、夢に追われ、流れ／流れ／流れてゆく。人混みから人混みへ。街角から街角へ。悪夢から悪夢へと。

舞台設定。夕暮れの赤。工事現場。組みかけの鉄骨(ジャングルジム)。彼女の気配を追って、君は此処に迷い込んだ／迷うことなく。

赤い光景のそこかしこに蹲(うずくま)る闇に目を凝らし、君は彼女の姿を求める。やがて。

「くす……お久しゅうございます」

君は戦慄(おのの)く。不意に降り注ぐその声の、その甘美さに。

見上げたその先。組まれた鉄骨の上に立つ、夜の帳の黒の影。

少女が——

「　　　　　　　　」

君は彼女の名を叫ぶ。だけどそれは言葉にはならず、言葉には届かず、ただの雄叫びとなって放たれた。それでも彼女はその意味を理解した。

「こうして廻(めぐ)り逢うのも、もう幾度目となりましょうや？」

酷薄に微笑む少女。竜の瞳が君を見下ろす／見下す。君の心臓が早鐘を打つ。血が沸騰する。酩酊感。歓喜のような憎悪。

「さあ、此度(こたび)の生でもまた、愛し合いましょう」

熱に浮かされたような声で告げる。空気が一変した。鉄骨の森のそこかしこに無数の気配が生じる。赤い光景のそこかしこに蹲(うずくま)る闇の向こうからそれは顕(あらわ)れる。

それはヒトのようであり、獣のようでもあり、鎧のようでもあり、骸骨のようでもあった。象牙の色と質感を持つ畸形のオブジェ。牙の戦士(スパルトイ)。君の記憶がその名を喚起する。そう、君は識っている。それが何ものであるかを。

鉄骨を蹴り、牙の戦士(スパルトイ)たちが跳躍する。殺意が／殺意が／殺意が殺到する。君もまた殺意を解き放つ。抑える理由は何処にもない。

今度もまた始まる。行く先を失った物語の、夢の最涯(さいはて)を踏み越えた亡霊たちの、終わらない戦い。

——それは喩えるならば、弔歌のようなものだ。

†††

それはまだ、英雄を必要とした時代の物語。

神代のむかし、黄金の時代、まだ竜が地上で権威を振るっていたあの頃の、夢を見るのが必死だったあの頃の、無邪気な夢(ロマン)が世に満ちていたあの頃の、語られるべくして語られる物語。

それは英雄譚。竜王(ペンドラゴン)と讃えられし偉人。その奇蹟の軌跡。

状況設定。戦火に灼かれる大地を駈ける竜の軍旗、竜王(ペンドラゴン)の御旗。地平を埋め尽くす敵軍。何倍にも及ぶ大軍勢に恐れることなく突き進む竜旗の戦士たち。怒号×悲鳴＝戦い(ウォークライ)の合唱。剣戟の響き。飛び散る火花。散りゆく命。するりするりと死んでゆく。切り裂かれた骸。撃ち抜かれた骸。踏み砕かれた骸。天を焦がす炎の赤と、地を呑み込む血の海の赤。そして黄昏の赤。

「黒」

戦場を包み込む総ての赤が不意に闇に呑まれた。夜の帳が下りてくる。それは天をも覆い尽くす巨大な黒翼。神殿のように巨大な漆黒の体躯。兇悪な爪牙に、不吉な凶星のように爛々と輝く邪眼。戦場に舞い降りた幻想の存在。

――黒竜(ドラゴン)。

恐怖に戦慄(おのの)く敵軍に、黒竜がその顎(あぎと)を開く。咽喉の奥に宿る、その躯(からだ)よりも冥(くら)い闇。吐き出される黒い劫火。それは形あるものの一切を灰燼に帰す鏖殺(おうさつ)の吐息。竜の息吹が敵軍に降り注ぐ。

人と馬のみならず刃や鎧に至る総てが、瞬く間に腐り落ち、黒い塵となって散った。恐慌に陥り潰走する敵。竜旗の軍の歓声と勝鬨(かちどき)。

戦場の総てを見下ろす者がいる。黒竜の頭の上に立つ、白銀(しろがね)の甲冑に身を包む、ひとりの青年の姿。

そう。彼(か)の御仁こそ、誉れも高き白の英雄。黒竜を従えた竜の支配者(ペンドラゴン)その人なり。讃えよ、讃えよ、我等が王。おお、竜王(ペンドラゴン)！　其の名は我等の希望なり！

竜王(ペンドラゴン)を讃える兵たちの声が戦場に轟く。君を崇め、讃える声が。

君は栄光の頂点にいる。君が望む望まないに拘(かか)わらず。

†††

このような戦いを、君は幾度と幾百幾千幾万と繰り返してきた。それらの記憶のほとんどは磨耗してしまったが、身体はその総てを憶えていた。心の記憶を磨り減らすことで、身体の記憶は研ぎ澄まされていった。

襲いくる牙の戦士(スパルトイ)の群れを、君は呼吸するよりも容易く切り裂き／引き千切り／撃ち砕き／撃ち滅ぼした。君の白いコートには汚れひとつない。足下には粉々に砕けた牙が転がっている。竜の牙。それが牙の戦士(スパルトイ)の正体だった。

ぱちぱちと拍手が鳴った。彼女が手を叩きながら、くすくすと笑う。

「凄い凄い。流石は竜王(ペンドラゴン)、妾(わたくし)の王さま。こんなにも……輪廻の竜が皮一枚になってしまうほどの時を経ても、妾(わたくし)たちの物語がとおいとおい記憶の彼方に消えてしまうほどの時を経ても、変わらず、君は、美しい」

陶然とした表情、あの頃と同じ恋に焦がれる乙女の貌で、彼女は告げる。君への恋を。

君の心にも無数の何かが飛来する。だがそのことごとくが形になることを拒んだ。君には殺意だけがあれば良かった。

かつては違った……はずだ。君の記憶は既に定かではないけれども。身を灼き尽くすような怒りと全身の血が氷結するような憎悪、昏(くら)い海を沈んでいくような悲しみ――それら制御できない激情の嵐は、混沌としたまま暴走していたはずだ。その混沌の渦から生じる無数の疑問を殺意の刃に託して戦っていたはずだ。何故だという想い。何故か／何故だ／何故なのか／何故／何故／何故／何故こうな

ってしまったのか――
　しかし、今は違う。ただ純化した殺意／戮(ころ)さなければ／のみがある。身を灼き尽くすような怒りと全身の血が氷結するような憎悪、昏(くら)い海を沈んでいくような悲しみ――その総ては調和の中にある。
　彼女が鉄骨の上から宙に身を投じる。重力を無視して、ふわりふわりと、黒いドレスのスカートを翻し音もなく地面に着地する。
「我が君」
　彼女は首を反らし、喉元を見せる。そこに埋め込まれた金属質(メタリック)に輝く黒の鱗。逆鱗――竜の急所を曝(さら)し、夜の帳の少女が告げる。
「可愛がって下さいませ、いつものように」
　恋に焦がれた声で、呪いのように。
「死の接吻を交わし、刃の愛撫を交わしましょう。いつものように。これからもずっと」
　君は語る言葉を持たない。そんなものは遠い神代の果てに置き去りにしてきた。与えるものは言葉ではなく、刃か毒か呪い。戮(ころ)さなければ。
　君の全身にエーテルが駆け巡り――

「撃(TE)ェ――――――ッ！」
　突然、銃弾の雨が君と彼女に降り注いだ。噴き出す血煙。夜の帳の少女を引き裂く銃弾の牙。
　君の白いコートが翻(ターン)る。同時にエーテル海に折り畳まれた質量が展開され、白いコートは変質、巨大化。白亜の楯となって君を護る。
　銃撃はしばらく続いた。次いで強い衝撃、爆風。砲弾が撃ち込まれた。白亜の楯が鱗(ヘクス)状に解けて、崩れる。視界が開ける。
「動くなぁぁぁぁっ(フリィイィイィイズ)！」
　工事現場は武装した一団によって囲まれていた。鎧甲冑を着たゴリラのようにも見える、滑稽なシルエット。竜撃装甲服――防衛隊が竜害対策として編成した、パワードスーツ部隊である。
　鋼鉄ゴリラの群れの中、一人だけ場違いな者がいた。どう見ても年端のいかない女の子だが、不可解なことに司令官の姿をしている。あまつさえ煙草を咥えている。声の主はその子だった。
「エーテル強度三〇一六五五七二二。やはり神話固体です。ただし反応が融け合っていて特定が困難です」
　装甲服(ゴリラ)からの報告に頷き、その子は誰何した。
「君が今回のドラゴンかい？　それともそっちでくたばってる方か？　迷惑なんだよなー毎年毎年。仕事するこっちの身にもなってくれや」
　君は足下に目をやる。銃弾に撃たれた夜の帳の少女が斃(たお)れている。その有り様は死体というよりは、肉と骨と黒い布切れの何かだった。しかし。
「師団長っ！　あ、あれを……っ！」
「なぁぁっ⁉」
　夜の帳の少女の残骸が、黒い靄(もや)になって揮発していく。その靄の中から無数の鴉や蝙蝠、蛇や地蟲が湧き出して、集い、無理矢理に結合した。
　鴉と蝙蝠と蛇と地蟲の群れが少女の容(カタチ)を模(かたど)る。
　君は彼女を追おうとする。しかし遅すぎた。少女の鴉の羽根、蝙蝠の飛膜、蛇や地蟲で編まれた黒いドレスが翻(ターン)り、エーテル海に折り畳まれていた竜翼が広がる。
　黒翼のドレスをひらめかせて、少女が君に微笑みかける。
「無粋な邪魔が入りました。今度はもっと雰囲気(ムード)の良い場所で、逢引(デート)きしましょ？」
　スカートの裾を掴んで、おしゃまな感じに礼をする。強い焦燥が君の胸を衝く。
「逃がすな！　撃……」
　装甲服(ゴリラ)たちが一斉に身構える。君もまた白いコートを翻(ターン)し……
衝撃。
　それは黒翼の羽撃(はばた)き。黒い爆風が駆け抜け、君の身体は舞い、鉄骨が崩れ、装甲服(ゴリラ)が吹き飛んだ。工事現場が激震する。
　全てが治まったときには少女の姿は何処に



もなかった。ただ崩れた工事現場と鉄骨の下に埋もれてもがき苦しむ装甲服（ゴリラ）たちがいるばかり。

——彼女を逃した。酷い脱力感。君はもはや立ち上がる気力すらなく、そのまま地面に転がっていた。

「あー……動くな。動くなよ？」

司令官の姿の女の子が君に銃を向け、恐る恐ると見下ろしている。

†††

——以下、防衛隊第一七師団、通称『対竜機甲師団』基地内における、神話固体あるいはそれとの強い関係性が疑われる幻想固体、コード名『白桂（ホワイト・ナイト）』に対する事情聴取記録より抜粋。質問者、防衛隊第一七師団長。

Q：よーし吐け。全部ゲロっちまえ。楽になるぞ。んー、どうした？　黙秘は君のためにならんぞネタは全部割れてんだ観念して洗いざらい白状しやがれ聞いてんのかコラァ！（煙草に火を点ける）……フゥー。なぁ……君にも家族がいるだろう。今の君を見たら、悲しむんじゃないのか？　私にもな、息子が一人いるんだ。可愛い盛りさ。目に入れても痛くないって奴だよ。はは、親馬鹿の言うことだがな。つーか本当に私好みの美少年に成長しちゃってまぁ……濡れるね。ぶっちゃけ濡れるね。この国が法治国家じゃなかったら、とっくに犯しているね。むしろ犯されたいね。ファックミープリーズガンホーガンホーガンホー。愛ＬＵＶマザーファッカー。あーあ、息子のムスコに穴という穴（以下、不適切な表現が続くため二六万文字削除）……あ、カツ丼食べる？

Ａ：（無言）

（以後、聴取終了までＡは完全黙秘）

防衛隊第一七師団。通称『対竜機甲師団』は対幻法の発足に伴い編制された、竜害対策専門の機甲師団である。国防上、極めて重大な役割を担う我が師団は、形式的には陸防の隷下組織でありながら独立した指揮権を持ち、最新兵器で武装された精鋭中の精鋭である……建前上は。

現実には、我々は――いや人類の科学力はドラゴンに対する決定的な手段を未だ見つけ出せずにいる。ドラゴンにまったく歯が立たない戦力と、拡大する被害。集中する批難の声。おかげさまで我が師団も今ではすっかり日陰者だ、糞ッタレ（サノバビッチ）。

　というワケで師団を預かる身としては、それなりに必死だったりするのである……どうした、不可解そうな顔し腐りやがって？　そのガキを見るような目を止めれ。私ゃ歴（れっき）とした竜将だ。あー、ほら。ここんとこに付いてる階級章に注目な。師団長なんだぞー！　えらいんだぞー！ってヤツである。馬鹿にすんな。あとこう見えても子持ちだ。

　兎に角、我々は『白桂（ホワイト・ナイト）』――あの白コート男の捕獲に成功した。彼が神話固体（ドラゴン）と大きな関わりがあるのは間違いないだろう。『白桂（ホワイト・ナイト）』の研究を通して得られる情報は、今後のドラゴン対策に大きく貢献するだろう。何としても成果を出さにゃならん。もう二度と上の連中に税金泥棒だの税金強盗だの総兵力一万と一人の税金盗賊団だの言わせるものかキスマイアス！

　現在、『白桂（ホワイト・ナイト）』は厳重な警戒とエーテル的対抗措置が施された特殊監房に入れられている。ドラゴンとの関係性がある以上、これでも心許なくはあるが、今のところは大人しい……というより何つーか、上の空つーか、何のリアクションもないつーか、抜け殻って感じだ。

　あー。これはこれで困ったなー。どーすりゃいいのかなー。あーあ。

　……ったく面倒事ばかりが、私ンところに集まりやがる。ガッテム。

†††

「可愛がって下さいませ、いつものように」

　耳元で囁く声。その甘さに君の心は陶酔する。抱き寄せて口づける。畏れるように。どれほど唇を重ねても、どれほど肌を重ねても、慣れることはなかった。むしろ愛すれば愛するほど、その畏れは君の中で大きくなり、取り返しのつかない重さになって君を呪縛する。

　臆病な君を、だけど彼女は笑って許した。背中に手を回し、強く強く抱き締める。君の首筋に舌を這わせ、痕が残るほどに強く強く口づける。

　唇を離し、今度は自らの喉元をさらす。そこに埋め込まれた金属質（メタリック）に輝く黒の鱗。逆鱗。

　君もまた、彼女の首筋に舌を這わせる。彼女の逆鱗に口づける。

「あ……」

　小さな悲鳴が彼女の口からこぼれた。

　君はさらに彼女の胸に手を重ね、肌と肌を合わせ、より強く、より深く、

　奥へ、

　奥へ、

　結びつき、

　融け合い、

　――そう、君は憶えている。

　その手で。その肌で。その唇で。その舌で。その魂で。

　彼女の温もりを。彼女の柔らかさを。彼女の脆さ、儚さを。彼女の味を。彼女の想いを。君の総てが、彼女を記憶している。

　彼女は君の半身。失った今でも、裏切られた今でも、そう想う。

　それはまだ、英雄を必要とした時代の物語。だけどそんな思惑とは関係なしに、静かだったあの夜の、安らかだったあの夜の、愛おしかったあの夜の、とおいとおい記憶。

　時間を凍らせたいとまで願った、夜の記憶。

†††

　君は目を覚ました。どうやら夢を見ていたようだ。甘い痛みに君の胸が疼く。

　何の夢かは忘れてしまった。君にとって記

憶というものは、まるで指の隙間から零れ落ちる砂のように留めようもなく失われていくものだ。

　君はもう自分が何者であったかも、いつ生まれ何処から流れてきたのかも、自分が今、何者であるのかも、はっきりとは思い出せない。

　ただ自分がかつて夢に破れたこと。英雄となって甦ったこと。夢のために戦場を駈けたこと。彼女と共に駈けたこと。総てを手に入れ、総てを失ったこと――そんな虚ろいゆく幻影のような記憶を、ただ想いだけで繋ぎ止めている。

　身を起こし、周囲を見渡す。此処は監房。彼女を逃がしたあの日、防衛隊に捕まった君は基地まで連行され、此処に閉じ込められた。

　抵抗はしなかった。君にとって彼女以外のものは、彼女を戮す以外のことは何の価値も持たなかった。何も感じていないから、何もしなかった。ただそれだけだ。

　監房の、エーテル流の動きを感じ取る……どうやら、かなり厳重な封印が施されているようだ。それが君に対してどれほどの効果を持つのか、甚だ疑問ではあるが。

　監房の中、孤独なこの空間で、君の感覚は研ぎ澄まされていく。意識の糸を広く、深く、エーテル海へと伸ばしていく。彼女の気配を捜し求める。

　逃がしはしない。この時代に彼女はいた。廻り逢えた。今度こそ、今度こそは戮さなければ。「何を?」竜を。彼女を。「何故?」解からない。理由は遠い神代の果てに置き去りにしてきた。戮さなければ／戮さなければ／戮さなければ。何もかもが磨り減り、零れ落ちた君の、それが唯一の存在理由。

戮さなければ／戮さなければ／戮さなければ／（意識の糸はなおも伸び）／戮さなければ／戮さなければ／戮さなければ／戮さなければ／（蜘蛛の巣の如くエーテル海に拡がり）／戮さなければ／戮さなければ／戮さなければ／戮さなければ／戮さなければ／（彼女を）／戮さなければ／（彼女）／戮さなければ／（夜の帳）／戮さなければ／（愛おしかったあの夜の）／戮さなければ／（意識を広く、深く）／戮さなければ／（奥へ、）／戮さなければ／（奥へ、）／戮さなければ／（奥へ、）／戮さなければ／（奥へ、）／戮さなければ／（奥へ、）／戮す／（奥へ、）／戮す／（奥へ、）／戮す／（奥へ、）／（奥へ、）／（奥へ、）／戮す／戮す／戮す／（奥へ、）／（奥へ、）／（奥へ、）／（奥へ、奥へ、奥へ、）／戮す戮す戮す戮／奥奥奥奥奥奥奥奥奥奥奥／戮戮戮戮戮戮戮戮戮戮戮戮戮戮戮戮戮戮戮

嗚呼。

なんだ。

其処に、居たのか。

†††

　羽撃きと啼声と羽音と這いずる音と。あらゆる不快な音が爆音のように基地を襲った。

「なんじゃこりゃあああああっ!?」

　師団長の声は無数の掻き消される。押し迫る闇闇闇闇闇闇闇闇闇闇、夜の帳。暗黒の海が基地全体を呑み込む。

　それは無数の闇夜の命。鴉／梟／夜鷹／蝙蝠／蝶／蛾／蠅／甲虫／蛇／蜥蜴／蟻／百足／蚯蚓／蛭……汚怪な黒の大軍。黒い嵐となって吹き荒れ、黒い波濤となって荒れ狂う。

　基地はたちまち混乱に陥った。しかし黒どもの群れは、錯乱する人間たちに何の興味も示さず、ただ一点だけを目指して雪崩れ込んでいく。

　君が囚われている監房へと。

　エーテル海に沈んでいた君の意識が、ゆっくりと現実に引き戻される。

　目を開く。監房のそこかしこから滲み込む闇闇闇闇闇闇闇闇闇闇闇闇、夜の帳。その向こ





うから、無数の禽(とり)やケダモノに蟲どもが湧いてくる。羽撃(はばた)きと啼声と羽音と這いずる音が君の耳朶を打つ。不協和音。

だが生理的嫌悪を催すそれはラジオのチューニングが合うかのように、徐々に指向性を持ち始める。地獄めいた不協和音が、奇妙な合唱(コーラス)となり、ひとつの旋律(メロディ)となり、ついには言葉になる。

「ご機嫌麗しゅう、我が王(マイ・ロード)」

禽(とり)やケダモノに蟲どもが集結し、結合した。禽(とり)やケダモノに蟲を編んで、夜の帳の少女が形造られる。

「差し出がましいとは思いましたが、お迎えにあがりました」

眼窩から鴉の首を生やして、少女は微笑んだ。君は歓喜で打ち震える。苦い愛は毒となって心(ハート)の臓を締めつけ、甘い憎悪は麻薬となって君の脳を蕩かす。

彼女のスカートが翻(ターン)り、無数の禽(とり)が翔(と)び出した。羽撃(はばた)き。嬌声。君の肉を啄ばみ尽くすべく、黒風となって殺到する。

君が意識するよりも速く、白いコートが翻(ターン)る。コートの裾が倏(しゅ)る倏(しゅ)ると解(ほど)け、鋼糸の網となって広がった。

網に捕らわれた禽(とり)どもが細切れに切り刻まれて、床に落ちる。夥(おびただ)しいほどの血の雨が君を、彼女を濡らしてゆく。

君は舞う。白いコートが翻(ターン)る。鋼糸の網が急速に集束し結晶し、白刃の帯となって伸びる。波打ち、螺旋を描いて、少女に襲いかかる。

少女は翔(と)ぶ。黒いドレスが翻(ターン)る。スカートの裾から巨大な蟷螂(かまきり)の鎌が出現し、風を切り、弧を描いて、君に襲いかかる。

血の雨の中、死の舞踏を舞う白と黒。酸鼻極まる惨美な光景。

嗚呼、戦場だ。

郷愁にも似た想いが、君の胸に去来する。

戦争の色彩と芳香。打ち合う刃の演奏、歌曲(ウォークライ)。衝撃と炸裂の渦。

ぶつかる白刃と黒刃。衝撃／摩擦／爆ぜるエーテル。荒れ狂う爆風×爆光。

戦いの衝撃が、監房を吹き飛ばした。

嗚呼——戦場だ。

彼女と共に駈けた、あの黄昏の場所にも似た。

†††

それはまだ、英雄を必要とした時代の物語。

神代のむかし、黄金の時代、まだ竜が地上で権威を振るっていたあの頃の、夢を見るのが必死だったあの頃の、無邪気な夢(ロマン)が世に満ちていたあの頃の、語られるべくして語られる物語。

それは英雄譚。竜王(ペンドラゴン)と讃えられし君の、栄光へと到る道程。

君は戦場を駈けていた。

その記憶のほとんどは君の中から零れ落ちてしまった。ただ確かなのは、君はその場所で血煙を呼吸し、涙の泥濘を這い、絡みつく死を振り払い、敵に遍(あまね)く死を撒き散らしてきたこと。幾千幾万の骸を踏み躙り、踏み砕き、踏み越えてきたこと。血の色に染まった大地の上と、黄昏色に燃える空の下を駈けたこと。彼女と共に駈けたこと。

はじまりの場所から、随分と遠くに来てしまった。

(神託の間。神鉄の鎖で縛られた竜。主従の儀礼。神官は謳う、英雄の誕生を)

はじまりの場所は、もう此処からは見えない。

(王位継承の式典。一糸乱れぬ白銀の騎士たち。広場を埋め尽くす民衆。君の宣誓。瀕死のこの国に再び強さと誇りを。歓声。君を讃える声、声、声)

はじまりの場所が、どんな場所だったか、何も憶えていない。

(侵攻する狂王の軍。迎え撃つ竜王の軍。血の色の黄昏。駈ける白銀の騎士たち。翔ける

黒い翼）
　一度も振り返らず、一度も省みず、ただひたすらに、ただひたむきに、駈けた。翔けた。
（夜営。無数の篝火。盃を酌み交わす兵たちの陽気な笑い声。夜空に響き渡る彼女の歌。他愛もない恋の歌（ラブ・ソング）だと、彼女ははにかんだ）
　何もかもを置き去りにして、駈けた。翔けた。
（反撃の狼煙。敵領土への進攻。竜の導きで迷いの森を抜け、敵主力の背後を突き、これを撃滅する）
　無我夢中で駈けた。翔けた。
（敵の王都へ雪崩れ込む。城壁を粉砕する竜の吐息（ドラゴン・ブレス）。護りを失った国など、純潔を奪われた生娘と同じ。蹂躙蹂躙蹂躙）
　夢（ロマン）の中を駈けた。翔けた。
（廻り出した運命の輪は止まらない。時代が英雄を求めていた。世界を呑み込む戦禍を鎮めるために、さらなる戦果を求め、戦火を拡げる）
　駈け抜けた場所の景色は、遥か後方へと流れてゆく。何も留めず、何も刻まない。
（味方を救うために敵を殺した。敵を赦すために味方を殺した。賢者を識るために愚者を殺した。愚者を治めるために賢者を殺した。聖人を護るために罪人を殺した。罪人を解き放つために聖人を殺した）
　何処から流れて来たのか。どんな道を通って来たのか。何も憶えていない。
（十人を生かすために一人を殺した。百人を生かすために十人を殺した。千人を生かすために百人を殺した。万人を友として、万人を敵とした。総ての命を天秤（はかり）に掛けて、生きるべきと死すべきに切り分けた）
　人間を人間足らしめるもの総てを捨てて駈けた。君は英雄になったのだから。
（人間を人間足らしめるもの総てを捨てて翔けた。君は怪物になったのだから）
　総てを捨てて、それでもなお――
（総てを捨てて、それでもなお――）
　君の傍らには、彼女がいた。
（君の傍らには、彼女がいた）

　そして――
（永きに渡る戦乱は終わった）
　君は夢の最涯（さいはて）を超えた。
（聴け、世界中で雷鳴のように轟く歓声（こえ）、歓声（こえ）、歓声（こえ））
　君の物語は此処に完成した。
（君を讃え、畏れ、敬い、崇め、謳い、歌う聲（こえ）、聲（こえ）、聲（こえ））
　君は英雄としての務めを見事に完遂した。

――閃光（ホワイト・アウト）――

――それは英雄譚。その大団円（フィナーレ）。最終日の最終幕。
　舞台設定。燃える空の赤と、大地を染める血の赤。
　舞台中央。屍と屍と屍の絨毯の、二度と息せぬ残骸の上に呆然と立ち尽くす君の姿。
　見ろ、これが夢の最涯（さいはて）の向こう岸。君が追い求めた光景。
　そうだ。此処が君の王国だ。
　君を見下ろす影がある。夜の帳を気配（ドレス）に纏う漆黒の少女。

　君の王国は、黒竜によって滅ぼされた。
　彼女によって滅ぼされた。

†　†　†

　度重なる激震が基地を襲った。
「何が起こっている！　状況を報告しろ！」
「『黒馬黒龍（ブラック・クィーン）』です！　『黒馬黒龍（ブラック・クィーン）』が地下特殊監房の『白桂（ホワイト・ナイト）』に接触！　交戦しています！」
「チィィッ！　何なんだ、あいつら!?」

黒いドレスが翻(ターン)る。黒翼が広がり昇降機(リフト)の縦坑(シャフト)を翔け昇／白いコートが翻(ターン)る。白いコートが縛鎖(チェーン)になって伸び黒の少女を拘束する。鎖が少女の肌に食い込／黒いドレスが翻(ターン)る。スカートの中から蟷螂の鎌が伸びて鎖を断／白いコートが翻(ターン)る。鎖鎌が伸びて、縦坑(シャフト)の壁に突き刺さる。鎖が急速に巻き戻されて、君の身体が宙を舞う／さらに翻(ターン)る。白いコートから無数の釘(ネイル)が飛び出し、少女を襲／黒いドレスが翻(ターン)る。甲虫(スカラベ)の群れが少女の周囲を飛び回り、釘(ネイル)を跳ね返／白いコートが翻(ターン)る。コートが炎に包まれ爆ぜた。爆風に押され、君は弾丸のように飛翔する。必殺の蹴りを今／黒いドレスが翻(ターン)る。スカートの中から竜の尻尾が伸びて、君を襲う。破壊槌の如き一撃を今／

　激突。

　縦坑(シャフト)の壁をぶち抜き、何処かのフロアに躍り出た。床に叩きつけられる寸前、白いコートが翻(ターン)り、クッションに変化(ターン)。衝撃を受け止める。

　君に続いて夜の帳の少女が、フロアに飛び込んできた。彼女は手にした白い何かを君に投げつける。それはいくつもの牙。宙にばら撒かれた牙は衝撃波と共に人間サイズまで巨大化、見えない鑿(ノミ)に彫刻されるようにヒト型に削り落とされて、牙の戦士(スパルトイ)と化す。

牙の戦士(スパルトイ)たちが一斉に飛びかかる。

　白いコートが翻(ターン)り、コートの中から長大な杭が伸びる。最初の一体が心臓を貫かれ、その真後ろに続く一体が顔面を撃ち砕かれた。だが残りの牙の戦士(スパルトイ)たちは恐れる様子も見せず、掌(てのひら)から／腕から／肘から／踵から、刃や槍の穂を出現させ、君を襲う。

　君は身を屈める。白いコートが翻(ターン)り、白い殻(シェル)となって君を包み込んだ。牙の戦士(スパルトイ)たちの攻撃が弾かれる。

　同時に殻(シェル)から無数の杭がヤマアラシの如く飛び出して、牙の戦士(スパルトイ)たちを串刺しにした。

　殻(シェル)がひび割れた。中から孵卵した君は白い稲妻となって、彼女に向かった一直線に駈ける。

　轟音。

　寸のところで躱される。彼女は黒翼を羽撃(はばた)かせ、天井を破壊しながら上階へと逃れる。降り注ぐ瓦礫。

　――逃がすものか。君は速度を殺さず、壁を蹴って跳躍。彼女の後を追う。

　白いコートが翻(ターン)った。

「……ッ!?　竜王(ペンドラゴン)！」

　コートは分解され、無数の鱗(ヘクス)となって君の体表を覆い、君の体内に浸透し、君の細胞を造り替える。君が変身(ターン)する。

　君の貌(かお)は透明な甲殻(ガード)に被われ、君の躰(からだ)は銀の鱗を鎧い、君の腕は刃を束ねて造った翼と化し、君の脚は複雑に変形して霊爆機関(オーギュメンター)と化し、君の心臓は霊動機関(エーテルエンジン)と化し、君の血は光(エーテル)を運び、君の心は弾丸と化した。今の君は刃金(ハガネ)で造られた猛禽(イーグル)であり猛禽(ラプター)であり猛禽(ベルクート)だった。

　彼女に向かって、光の速度で翔ける。

「アアアアアアアアアアアアアアアア！」

　彼女の悲鳴が響き渡った。超スピードの特攻を喰らい、彼女の骨という骨が砕け、臓腑(はらわた)という臓腑(はらわた)が爆ぜた。皮が裂け、筋肉が引き千切れ、血が蒸発し、少女のカタチが崩れてゆく。

「アアア！・ア、アアア……ははは……ア、ははハハッ、アハハははハははッ！」

　悲鳴はやがて哄笑に変わった。原形を留めぬほどに潰れた貌(かんばせ)、だがその竜の瞳が、清らかに濁った瞳だけが、爛々と輝き、君を見つめている。

「あはははははははははははははは！」

　哄笑が君の耳朶を打つ。君の脳に刻まれる。記憶の奥底から痛みを引きずり出す／雑念(ノイズ)／雑念(ノイズ)／雑念(ノイズ)／哄笑。黒竜の哄笑。あのときと同じ――

「あはははははははははははははは！」

†　†　†



「あははははははははははははははははは！」

咽返る(むせかえ)ほどに甘い血臭と、嘔吐をもよおすほどに甘い腐臭の中で、彼女は嘲笑(わら)っていた。

それは英雄譚。その大団円(フィナーレ)。最終日の最終幕——

「違う！」

舞台中央。屍と屍と屍の絨毯の、二度と息せぬ残骸の上で、夜の帳の少女は叫ぶ。

「まだ何も終わってはいない！」

狂笑に歪むその貌(かお)は、慟哭(な)いているようにも見えた。

「……ご機嫌は如何かしら？　妾(わたくし)の王さま」

竜の瞳が君を見つめている。陶然とした瞳。恋する乙女の瞳。

「これがヒトの生というものです。栄光の輝きは瞬く間に錆びつき、幸福の花は容易く枯れ果てる。総ては淡く消えゆく陽炎に過ぎません」

そう——

「とても、愉快」

恋にも似た悪意を込めて、彼女は嗤(わら)う。

「取るに足らない、くだらない命が右往左往する様が」

悪意にも似た恋を、君に囁く。

「無様に踊る君の姿が。愛おしいほどに」

君の思考が灼け尽きた。何もかもが真っ白になった。何もかもが爆裂した。

——戮さなければ！

気づけば君の剣が、彼女を刺し貫いていた。

「……そう、それで良いのです。妾(わたくし)の王さま」

心臓を貫く刃を意に介さず、彼女は優しく微笑んだ。

「妾(わたくし)が英雄(きみ)の敵です」

彼女の貌が近づく。ふたりの唇が重なった。口づけは甘い血の味がした。

「妾(わたくし)を倒さない限り、英雄譚は終わらない」

唇を離し、君の耳元で囁く。熱い吐息が君の耳をくすぐる。

「英雄が悪を倒さない物語を、世界は決して赦さない」

君は刃をさらにねじ込む。深く。深く。深く。心(ハート)の奥に殺意を届ける。

「終わらない！　たとえその身が朽ちても魂は流転する！　英雄譚を完成させるまで、ずっと、ずっと、永遠に！」

少女のカタチが崩れてゆく。黒い靄が、夜の帳が、彼女の内から溢れ出す。
「永遠に妾を追い求めるのです！　妾を！　妾だけを！」
夜の帳が君を呑み込み、黄昏の赤を包み込む。
「そうだ！　君は永遠に苦しみ続けるのだ！　竜王！　おお、竜王！　愛しい、愛しい、妾の王さま！」
夜闇を編んで、竜の牙が、竜の爪が、竜の鱗が、竜の翼が、竜の尻尾が、竜の威容が、清らかな光を湛える竜の瞳が今――
「君は世界から必要とされ続ける！　未来永劫に！」

†††

そして、エーテル海に折り畳まれた巨大な質量が展開された。
衝撃と共に黒い爆風が基地を破壊する。
爆心地に如何なる闇も深い漆黒があった。夜闇を編んで創られた、黒竜の巨体だった。
黒竜の顎が君を捕らえる。
竜の牙が喰い込んでくる。刃金の猛禽となった君の身体がひび割れる。噴き出す君の鮮血を彼女は嚥下した。
《……甘露なり。英雄という天上の美味をこうしていつまでも愉しめる竜が、他に居りましょうか？》
彼女は君を一気に引き裂いたりはしない。苦しみが長く続くように、さらなる甘美を引き出すために、ゆっくりゆっくりと君を苛む。
《生まれては喰われ、甦っては喰われ……真、妾と王の関係は淫靡なものですね……》
刃金の甲殻を破り、肉をえぐり、竜の牙は君の臓腑まで達する。そして。
《こうして何度も、何度でも……血を舐め、肉を食み、骨をしゃぶって、髄を啜り、臓腑を貪り、心臓を飲み干して……》
乱舞する激痛がふと止んだ。彼女の牙がついに君を噛み千切る。
《何度も、何度でも、愛し合いましょう。終わることを赦されない英雄譚は、ふたりの物語は永遠に続くのだから》
裂かれ潰され砕かれながら、君の思考は光の速度で駆ける。光の速度で殺意を紡ぐ。
――そうか。そんなにこの身が欲しいのか。こんなにも、こんなにもくだらない代物が。ヒトだったものの残骸、英雄だったものの成れの果て如きが、そんなにも。そんなにも。
――良いだろう。くれてやる。いくらだってくれてやる。
だから竜よ。我が生涯、唯一人の君よ。貴女のその命も寄越せ。
《とりあえず、此度の生はこれにて……また来世でお逢いしましょう》
そして、竜の顎は君を食い千切った。
君のカタチが崩れてゆく。

†††

それはもう、失われてしまった英雄の物語。
あれからずいぶんと時は流れてしまった。
神は去り、黄金すら腐り、白銀は蟲に喰われ、青銅は錆び、英雄は墜ち、鉄は血を吸い肥え太り、何もかもが過ぎ去っていく。
やがて戦場から竜の姿は消え、夢は死に絶え、英雄の時代は懐かしむ者とていないまま、老いた猫のようにひっそりと息絶えて――だけど、そんな虚ろな時代の影で、君と彼女は求め合い、鏖し合ってきた。
輪廻をめぐり、逢瀬を重ね、刃を交えて、血肉を散らし、殺意は爆ぜて、全身を咀嚼され、死してはまた生まれ。生まれては死んで。
それは語られざる物語。ふたりのためだけの物語。
君の亡びた王国から君は歩き出した。彼女を求め、鏖すために。残った放浪の日々をど

う生きてきたのか、君は記憶していない。何処かの土地で惨劇をもたらしたのかも知れない。あるいは誰かのために奇蹟を起こしたのかも知れない。だが総ては零れ落ちてしまった。確かなのは、彼女を戮(ころ)せなかったということだけだ。
　夜の帳の少女が瀕死の君を見下ろしている。また次がありますと彼女は言って微笑んだ。
暗転。
　気づけば次の生が始まっていた。そのとき自分が何者であったのか、君はやはり記憶していない。王だったのかも知れないし、兵だったのかも知れないし、羊飼いだったのかも知れないし、乞食だったのかも知れない。確かなことはその生でも彼女を追い求め、流離っていたことだけだ。
　王か兵か羊飼いか乞食かそれ以外の何かだった君は、やはりこの生でも彼女を戮(ころ)せなかった。
　夜の帳の少女が瀕死の君を見下ろしている。また次がありますと彼女は言って微笑んだ。
暗転。
　気づけば次の生が始まっていた。それがどんな時代だったのか、君はやはり記憶していない。剣を手に覇を唱える乱世だったかも知れないし、聖書を手に魔女を灼く暗黒の治世だったのかも知れないし、鋤鍬を手に群衆が蜂起する革命期だったかも知れないし、戦争と平和の手札(カード)を手に玩ぶ遊戯の時代だったのかも知れない。確かなことはその時代でも彼女を追い求め、流離っていたことだけだ。
　戦いか暗黒か革命か遊戯かそれ以外の時代を生きた君は、やはりこの生でも彼女を戮(ころ)せなかった。
　夜の帳の少女が瀕死の君を見下ろしている。また次がありますと彼女は言って微笑んだ。
暗転。
　気づけば次の生が始まっていた。それがどんな場所だったのか、君はやはり記憶していない。それは屍の山を築き血の大河を流す戦場だったかも知れないし、栄華を極める貴族たちが毎夜踊る宮殿だったかも知れないし、ガス灯の明かりが幽(ゆら)めく魔都だったかも知れないし、監獄のような病室だったかも知れない。確かなことは何処にいても彼女を追い求め、流離っていたことだけだ。
　戦場か宮殿か魔都か病室かそれ以外の何処かで生きた君は、やはりこの生でも彼女を戮(ころ)せなかった。
　夜の帳の少女が瀕死の君を見下ろしている。また次がありますと彼女は言って微笑んだ。
暗転。
　暗転／暗転／暗転……
　それなことを繰り返してきた。そのたびに君の中から何かが零れ落ちた。何もかもが空っぽになっていって、それに反比例して殺意は研ぎ澄まされていった。
　あるとき君は屠竜の技を極め、あるとき君はその技に相応しい武器を求め、あるとき君はその武器を振るうための躰を鍛え、あるとき君はその総てを支えるための魂を磨いた。
　ヒトの残骸だった君は、英雄の成れの果てだった君は、輪廻を重ね、殺意を研いで、より強大な怪物へと変身(ターン)していった。
　そして遂に——

舞台設定。心象風景。燃える空の赤と、大地を染める血の赤。
舞台中央。屍と屍と屍の絨毯の、二度と息せぬ残骸の上で見つめ合う君と彼女。
彼女の竜の瞳が、驚愕に見開かれる。
君は微笑み、自らの喉元をさらす。そこに埋め込まれた金属質(メタリック)に輝く白の鱗。

——逆鱗。

君のカタチが崩れてゆく。

†††

　そして、エーテル海に折り畳まれた巨大な質量が展開された。

衝撃と共に白い閃光が黄昏の空を染め上げる。

《竜王(ペンドラゴン)……君は……》

白夜の光を編んで、竜の牙が、竜の爪が、竜の鱗が、竜の翼が、竜の尻尾が、竜の威容が、清らかな光を湛える竜の瞳が今——

《そんなになるまで……そんなものになってまで……》

彼女の竜の瞳に映ったのは、痩せ細り、色素が抜け落ちた、ひとりの老いぼれた白竜だった。この姿こそ、彼女だけを求めた君の——殺意だけを拠り所に、彼女の記憶を失うまいと足掻いた君の、最後に辿り着いた恋のカタチだった。

君は、老いた白子(アルビノ)の竜は、吼える。それはまるでナイチンゲールの歌声のように、美しい音色を空の隅々にまで響かせた。

応えるように彼女が、夜の帳の竜が、吼えた。それは紛れもない慟哭の叫びだった。そう、彼女はついに気づいてしまった。英雄譚は、ふたりの物語は疾(と)うの古(いにしえ)に終わっていたのだと。今の自分たちは、既に過ぎ去ってしまった物語の亡霊に過ぎないのだと。今こうして語られている物語は、喩えるならば、弔歌のようなものだ——

あるいは彼女は総てを識っていてなお、この物語にすがったのかも知れない。彼女が彼女の英雄を失わないための物語に。君と永遠を過ごすための物語に。それが狂気と識っていてなお。だけどそれを確かめる術を、君はもう持たない。

さあ、戮(ころ)そう。
ふたりの恋に、とどめを刺そう。

夜の帳が羽撃(はばた)いた。
白夜の光が羽撃(はばた)いた。
黒い竜は首をもたげ、
白い竜は首をもたげ、
黒い竜は顎(あぎと)を開き、
白い竜は顎(あぎと)を開き、
君の喉笛に、
彼女の喉笛に、
君の逆鱗に、
彼女の逆鱗に、

接吻(くちづけ)を——
接吻(くちづけ)を——

†††

防衛隊第十七師団長は、ただじっと基地の上空を見上げていた。
互いに牙を突き立て、戮(ころ)し愛(あ)うふたりの竜。
互いを喰らい、互いを貪り、螺旋を描くように廻り廻り廻りながら、ふたりは天へと昇っていく。

その光景を見て、嗚呼——まるで輪廻の竜のようだなと、思った。

やがて互いが互いを血の一滴残さず喰らい尽くし、全き虚無へと帰還する。

幻想は、いつもそうであるように、何も残さず去ってゆく。

幻想を終わらせるのは幻想だけ。それがこの風変わりな竜殺(ドラゴン・スレイヤー)し殿の世界観だった。

そして総てが虚無に還るその瞬間——白夜の光と夜の帳が爆裂した。空を染める黄昏の赤の中で。

ヒトの戦士の将は、ただじっと見上げている。ふたりの竜が融け合う爆心地(グラウンド・ゼロ)を。遍く総てのはじまりの場所を。

†††

それはまだ、英雄を必要とした時代の物語。

神代のむかし、暗黒の時代、まだ竜が地上で悪意を振るっていたあの頃の、夢と夢が輪廻の竜の如く互いを喰らっていたあの頃の、惨酷な夢(ロマン)が世に満ちていたあの頃の、語られるべき物語の前の物語。

英雄譚が受肉する前の、はじまりのはじまり、時代が序夜の第一幕の開場を待っている頃の物語。大して語るべきことがない物語。

　ひとりの少年がいた。少年には夢があった。何もかもが戦火に焼かれる無慈悲な世界の暗黒に呑まれ、それでも必死に輝く何かを掴もうとしていた。ヒトにとって大切な何かを懸命に守ろうとしていた。その夢が何であったのか、もはや知る術はないのだけれども。

　その夢を胸に、少年は狂気の渦中へと身を投じた。今にも泣き出しそうな目で。恐怖のあまり失禁し。血の臭いに何度も嘔吐しながら。

　涙にまみれ、小便にまみれ、ゲロにまみれて、それでも少年は絶望の嵐の中を駆け抜けた。掴みたいものがあった。守りたいものがあった。その夢が何だったのか、もはや知る術はないのだけれども。

　竜は、そんな少年をずっと見守っていた。それは最初、竜の瞳に映った取るに足らない、塵にも等しいちっぽけな命だった。だが無様に汚れた少年の、その気高さを見つめ続けているうちに、竜は少しずつ、くるっていった。恋に、くるっていった。

　そして物語は英雄譚の序夜、その第一幕へと繋がる。

　夢潰えた少年を、小鳥の羽毛さえそよがせぬ虫の息の少年を、射殺すような瞳で見下ろす夜の帳の少女。

　少女が少年に告げる。

「――我が真名をその魂にしかと銘記せよ」

　老いたる白竜よ。あの日の少年よ。

　それはこの世界で、君しか知る者のいない、彼女の名前だ。

「妾（わたくし）の名は――」

†††

「　　　　　　」

　君は彼女の名を呼んだ。だけどそれは言葉にはならず、言葉には届かず、ただの吐息として零れ落ちた。それでも彼女はその意味を理解した。

　応えるように、彼女は、呼んだ。

　この夢の最涯（さいはて）で。

　はじまりの場所（グラウンド・ゼロ）で。

　それはこの世界で、彼女しか知る者のいない、君の――

「僕の、名前だ」

*end.*





# 竜†恋[Dra+KoI]

## ∞竜の恋

ウロボロス

シナリオ
鋼屋ジン

イラスト
津路参汰

編集・デザイン
Mzk

発行
ニトロプラス

初出：角川書店「ザ・スニーカー」2006年4月号

NOT FOR SALE